

25PB-pm280

広範な現場体験からみた早期体験学習の意義

○内海 美保¹, 奥井 順子¹, 山原 弘¹ (¹神戸学院大薬)

【目的】2015年度から導入された「薬学教育モデル・コアカリキュラム平成25年度改訂版」では、薬学教育モデル・コアカリキュラムと実務実習モデル・コアカリキュラムが一本化され、基礎教育と臨床教育の連続性の強化が図られている。早期体験学習に関しては、2年次までに「患者・生活者の視点に立って、様々な薬剤師の業務を見聞し、その体験から薬剤師業務の重要性について討議する」等の到達目標が掲げられている。そこで、本調査では、本学における早期体験学習の教育的効果等を改訂版モデル・コアカリキュラムに沿って評価した。

【方法】2015年4月9日、及び2016年4月9日に、本学薬学部1年次生(計463名)を対象に、早期体験学習(訪問先:4月;薬局,9月;病院,企業,介護老人保健施設等から一施設を選択)を実施した。施設訪問の前後には、それぞれ事前準備、成果発表会等を実施した。一連の授業終了後、自記式評価票(計35項目)にて、学習の到達状況や学習へのモチベーション等を学生に自己評価してもらった。

【結果・考察】95%以上の学生が「早期体験学習の内容に満足している/授業内容を理解できた/授業を通じ、今後の学習のモチベーションが向上した」と回答していることが示された。また、訪問施設別に学生の学習到達状況を比較したところ、「病院薬剤師業務の流れ及び他部門との連携」「汎用される製剤の機械/工程」「製剤に関連する試験法」など、現場の特異性または専門性が高い項目においては、一部、施設間で有意差が認められたものの($p < 0.05$)、全体的な満足度や理解度、学習へのモチベーション等においては、訪問施設によって有意差は認められなかった。広範な現場を複数に訪問することや成果発表会等で学生同士が情報共有を図ることは、早期体験学習の学習効果を高める一助になることが示唆された。